

第7回ヘンデル・フェスティバル・ジャパン

企画3

チェスキー・クルムロフ城内劇場 真正バロック・オペラ招聘公演

「ヘンデル・オペラの名アリア」

演奏会批評 (岸純信氏)

『グランド・オペラ』2010年春号 p.155

◎ヘンデル・フェスティバル・
ジャパン2009

ヘンデル・オペラの名アリア

* * *

ソプラノ・ヤナ・ビーノヴァー・コウツカー
ソプラノ・ヴェロニカ・ムラーチコヴァー
フチーコヴァー／ヴァイオリン・廣海史航・天野
寿彦／ヴィオラ・小林瑞葉／チェロ・ロザリーエ
コウサリコヴァー／コントラバス／西本俊介
演出・スザナ・ウルボヴァー／解説・スザナ・ウ
ルボヴァー・三浦寿喜／指揮&チェンバロ・オン
ジエイ・マツエク

温

故知新」の精神漲る舞台。
チェコのチェスキー・クル

ムロフ城内劇場での「真正バロッ
ク・オペラ」のダイジェスト版と
して、『リナルド』や『アルチーナ』
など7作からアリアや二重唱が披
露されたが、特筆すべきは18世紀
当時の演唱スタイルの復元。フッ
トライトの活用、絵画や彫刻にイ

ンスバイアされた衣裳デザイン、
歌詞に合わせて曲線的な身振りを
細かくつけるという所作の約束事
など、往時の息吹が確かな説得力
のもとに伝わってきた。

モダンな演出法を否定する立場
にはない評者だが、その一方でこ
うした「考古学的検証」も大いに
尊重したい。解説者の演出家ウル
ボヴァーの端的な説明(池田椋子
の通訳も明瞭)で、人間の粗削り
な動きを象徴化する「バロック・
ジェスチャー」の概念がヘンデル
の譜面と直結することを理解した
が、中でも印象深かったのは『ソ
ザルメ』の二重唱でエルミーンラ役
が跪いた瞬間。様式的な動きが連
続する中で、この仕草が放った一
瞬の劇性はことに目覚しく、リア
リズムを超えるインパクトを体感
させてくれた。

さて出演者について。『セルセ』
等でフチーコヴァーの柔らかなメ
ゾ・ソプラノを堪能し、『アリオ
ダンテ』のガヴォットではマツエ
ク率いる合奏団の引き締まった響
きに感銘を受けたが、残念なのは
ソプラノのコウツカーの小さな声。
表現法には傾聴すべき箇所が多か
ったが、音量面では弦合奏とのバ
ランスを欠く部分がかかり生じて
おり、その点のみは惜しまれた。

(2009年11月21日、

トッパンホール)

岸 純信